

NST 介入した超高齢者症例の検討

桑名東医療センター NST

鈴木秀郎、須川 由理子、浅見悠美子

2011年3月～2016年3月にかけてのNST回診対象症例は164例でそのうち90歳以上の超高齢者は14例（90歳6例、91歳2例、92歳1例、93歳1例、94歳2例、98歳1例、102歳1例）。その特徴とNST介入後の効果、転帰について検討した。

検討項目：入院科、男女比、疾患、ADL、BMI、回診開始時血清アルブミン値、回診開始時総リンパ球数、介入時期、介入内容、介入した効果。

結果：入院科は内科5例、整形外科4例、胸部外科3名、外科2例。男女比は男3例、女性11例。疾患は感染症5例（肺炎3例、尿路感染2例）、大腿骨頸部骨折3例、大腿動脈閉塞3例、絞扼性イレウス1例、大腸癌1例。ADLの評価は高齢者の日常生活自立度（寝たきり度）判定基準を用いランクJ（生活自立）2例、ランクA（準寝たきり）4例、ランクB（寝たきり・座位可）2例、ランクC（寝たきり）6例。BMIは18.5以上が6例、18.5未満が8例。血清アルブミン値は3.0g/dl以上が3例、3.0未満が11例。総リンパ球数は1000/ μ l以上が5例、1000未満が9例。入院からのNST介入時期は2週間以内がなく、2～4週間が7名、4週間以上が7例。NST介入内容では食事内容が8例、食事と点滴が3例、点滴が2例、経管栄養が1例。介入した効果ありが5例、不変あるいは効果なしが9例であった。NST介入前と介入後のADLは大部分が不変あるいは悪化しており、改善がみられたのは1例のみだった。入院元は自宅から入院したものが10例、施設からの入院が2例、病院からの入院が2例。退院先は自宅が4例、施設が2例、病院が5例、在院死が3例。

まとめ；NST対象となった超高齢者14例は寝たきりで低栄養の症例が多かった。介入開始時期は遅くなる傾向にあり、NST介入の効果が明らかな症例は約1/3であった。介入後もADL低下がほとんどの症例にみられ、退院先も自宅以外となることが多くみられた。